お三輪

水野仙子

一

高い山々の頂はまだ雪の襞に蔽はれてゐるけれども、峠路には若草が萌え初めて、ぽか／＼とした日和も珍しくなくなりかけた時分、お三輪は羽前と岩代の國境にある山の湯に別れを告げて峠を下つて來た。宿ではスキーに來る僅かな西洋人の外には、これといつて對手のない冬籠りから漸く明けて、そろそろ湯治客のたてあふ頃となつてゐたのだけれど、お三輪が出て行かうとするのを強いて止めはしなかつた。彼女は主人に取つて決して惜しい女中ではなかつたのである。

それでもお三輪は此の山の湯に五月餘り足をとめた。それは彼女がかうした生活に入つてから、割合に落著いてゐられた分であつた。何處に行つても大抵其土地の空氣や其家の調子に馴れて來る時分になると、彼女は自分から出て行かうとするやうな感情を起すか、又は解雇されるかして、次から次へと渡つて歩いた。その渡り方は併し、普通の莫連者のやうな氣紛れからではなくて、止むを得ずさうなつて行かなければならぬやうな渡り方であつた。それを彼女は別に望みもしない。けれどもまた拒まうともしないで、追ひ立てられゝば立ち、居たくなければ居ないで次の場所へと移つて行つた。彼女は常にさうならなくてはならないやうなものを其脊中に負うてゐた。恰もそれが遁れられぬ彼女の運命であるかのやうに。

ぼんやりとして山を下りて來た彼女は、それから岩越線の分岐路のK町に足をとめて、其處の口入れから停車場前の旅館に住み込む事となつた。其翌日よく埃の上る二階の縁側を掃きかけたまゝ、幾條も

立ち騰つてゐる汽車の煙りを、お三輪は別に興もなさゝうに眺めて突つたつてゐた。そして列車が著くたびに表に出て客を呼ぶ番頭の禿頭を上から見下してゐた。其夜時でもない時にそれを思ひ出して、

『番頭さんの頭は隨分よく禿げてるなア。』なぞとつけ〳〵言つた。

『あま！』

人附きの惡い、そして年の割に禿げてる事を常にひどく氣にしてゐる番頭は、ぢろりとお三輪を眺めながら呟いた。

お三輪は別に何の痛痒も感じなかつた。そして今自分の言つた事も何も忘れたやうに。わざとでも何でもなく、彼女がいつもするやうに袂を擔いで、ばたり〳〵と草履を引擦つて去つた。

不思議に強い憎しみの念が、其跡に殘つてゐた。それを臭ぎ廻るやうに番頭は暫くぶり〳〵しながらひとりで氣持を惡くしてゐた。

彼女がかうして我にもなく不用意に蒔いた種は、思ひの外早く刈らなければならなかつた。1ケ月も經つか經たないうちに、お三輪は例の番頭と烈しい喧嘩をして、（何か客の前で番頭がお三輪の惡口を言つたとか何とかゝら初つたのであつた。）内儀（おかみ）が一寸番頭の肩を持つやうな言葉を洩らした爲めに、彼女は腹をたてゝすぐに其處を飛び出してしまつた。

折から夏場に向つてゐたので、次の口はすぐに見付かつた。其處は岩越線の沿道に當つて近年發見された温泉場で、K町の有名な料理店が、支店として營んでゐる旅館に向けられたのであつた。

お三輪が其處に著いたのはもう六月の中旬近い頃で、宿の後の山や前の繁みの中では、鶯も啼けばま

た郭公も啼いてゐた。ずん〳〵と氣持よく成長して行く青葉や、眞白な泡をたてゝ一刻の猶豫もなく流れて行く谷川や、澄んだ涼しい空氣やは、彼女の鈍い神經にも多少の刺激を與へた。假令一寸でも都會らしいK町の空氣を吸つて來たあとなので、お三輪は殊に寛(くつろ)いだやうな氣がしたのであつた。それに客足はまだ繁くなかつたので、料理番の口やかましさを除いては、割合に樂な所でもあるやうな氣がした。

二

『旅館みやこ』と空色に塗つた戸袋や洋館の板壁などに大きく書いてある文字は、林の中を潜つて來て直ぐ前面の高見を通つて行く汽車の窓からもよく見えた。みやこの主人は町の本店から一週間に一度位しか顔を出さないで、常には料理番が支配人を兼ねてゐた。

彼はもう頭には大分白髪が見え、四十肥りに太つた頑固な男で、目盲縞(めくらじま)の筒袖に汚れた白い前垂れを腹の下に卷き、其紐にはいつも金庫の鍵がぶら下つてゐた。彼の權力は時たま見える若主人よりも豪い位で、好かれ惡しかれ自分から言ひ出した事は決して曲げようとはしないで、遮二無二怒鳴りつけて押へて了ふのであつた。それを飲み込んでゐる女中達や番頭は、決して其時は逆(さから)はないで、自分が惡くなくとも惡るかつたといつて濟(すま)して了ふ事になつてゐた。若しさうでもしなければ、直ぐに鐵拳が飛ぶのである。けれども此暴力も彼は決して自分の爲めにするのでは、ないと心得てゐた。つまり常に留守である主人に代つて取締り、主人の爲めに好かれと圖るのである。之れが彼の道德であつた。

彼は板場が濟むと、時々家の内外を見廻つて、下駄の緒が切れているの、便所が汚れてゐたの、と注意を怠らなかつた。そんな時に何か手拔(てぬか)りを見つけられると、女中達はがみがみと怒鳴られるのを俟た

ないで、『はい〳〵』とふた返事をした。

彼は又餘分に祝儀を出した客や官位のある客を大切にし、其座敷には例の姿で顔も出せば、歸る時には玄關先に膝も折つた。彼はなるべく費用の掛らないやうにとしてゐる。倹約(つま)しい女客(をんなきやく)などに餘り重きを置かなかつた。それは此旅館の權威を現はす事であり、又從つて主人の爲めでもあると心得てゐた。さういふのが、小さい時からかうした社會の空氣の中に育つて來た彼の道德なのであつた。

七月八月の忙しさを見越して、今度雇入れた女中のお三輪は、この料理番の目に初めおとなしさうな女として映(うつ)つた。顏は一寸澁皮の剝(む)けたといつた方の部類で、肌はいゝけれども少し雀斑(そばかす)があり、額が狹く、眼は牛のやうに温和(をとな)しく、きらりと光るといふやうな事は絶對になさゝうだつた。中肉中背で廿七といふ年よりは二つ三つ若く見える。銀杏返しに結つてる髮はひどく癖毛だけれど、それがまた一寸仇つぽく、俯向(うつむ)いた拍子に見せる襟元に大きな黒子(ほくろ)があつた、其邊は後から見た時は一寸小粹にすら見えた。

けれどもたつた一日用をさせて見ると、料理番はすぐに首をひねつた。默つて物も言はないで夢中になつて働いてゐるかと思ふと、後(あと)に締りがなくて、掃除をしたあとに箒が投げ出してあつたり、仕事がぞんざいだつたりする。自分のやりかけた事をしをほせないで、人の方へ口を入れる。ひどく鼻にかゝる南部訛りの言葉も舌たるかつた。

『おい〳〵〳〵お三輪さん、幾ら言つても駄目だなア。』と時々料理番は大きな聲をあげた。

『どうしてね？』

お三輪は別にびくりとする容子も見えなかつた。そしてきつと何かしら言葉を返した。そして三日目にはもう擲られた。彼女は朋輩達が口答へするのを止せと眼顔で知らせてるのにも氣を止めず、いつもむきになつて料理番に向つて行つた。それでも結局はいつも自分がお詫びをしなければならなかつた。そんな時の後では彼女はひどく興奮して、

『ふん、ちつと位擲られたつて喰つた方がいゝ……』などゝ、それが原因となつた茶菓子の殘りを摘んだ事を悔いもせず、寧ろ得意な顔をして朋輩達を呆れさせた。

彼女は又大つぴらに吝嗇だつた。客に貰つた菓子を皆に配けるのが厭だといつて便所の中で喰べたり、蒸暑い日など、朋輩達が氷水を取らうとする仲間には決して入らなかつた。

『お錢出して氷水なんて飲む氣がしないね、たゞちつと甘いだけさ、それよりも無錢であの清水を飲んだ方がよつぽど增しだ。』

彼女はかう言ふのだつた。朋輩達も眞面目では段々彼女を對手にしなくなつた。そして手切金を竊まれたといふ、彼女の一生の痛恨事を却て笑話にした。

お三輪は十八の時に鄕里の鍛冶屋にお嫁にやられたのだつた。十ばかり年上だつた亭主は、相當に面倒を見てくれたけれども、何處か少し引摺りの癖に馬鹿に氣の強いお三輪は、姑と折合が惡く家の中には喧嘩が絶えなかつたので、亭主もほと〳〵困じ果てた上、三つになる男の子もあるのに、思ひ切つてお三輪を離緣して了つたのであつた。彼女は其時三十圓の手切金を貰つた。そして虎の子のやうに大事にしてゐるうちに、何時の間に何處でかそつくり竊まれてしまつたといふのである。

彼女はそれから餘計に吝嗇になつて行つたのであつた。

三

七月に入つてからは、さすがに此山合ひの湯の宿にも眩しく照りかへす日が續いた。河岸の岩の上に建つてゐる湯槽から、湯疲れのだるい足を運んで出て來る浴衣の人達が、三々五々橋の上に足をとめて、吹き上げて來る涼風を心地よげに貪つてゐる。或は遠くの宿からやつて來たお客達は、洋傘代りに濡れ手拭ひを頭に乘せて歸つて行く。近い種馬所から毎日のやうに體を洗ひに來る馬の毛並みに、きら〳〵と強い日光が輝いた。青空高く時々漂つて行く白い流れ雲が、山の中腹に陰を落すと、其陰に恰も生きものゝやうに山腹を走つて行く。やかましい蟬しぐれの折々には、すべてを超越したやうな聲で閑古鳥も啼いた。

みやこの勝手口から、有り合せた跛の下駄を引摺つて、客座敷の縁の方に出て來た番頭は、其高見から一段低い場所に出來かけてゐる普請場を見下(みおろ)して、

『おうい、おれの情婦(いろをんな)ゐねえかア。』と剽輕(ひやうきん)な大聲を振下した。

普請場に働いてゐた二三人の大工は皆顔を上げた。

『情婦(いろをんな)つて何だ、どれだ？』

『南部(なんぶ)よ！』と番頭はすましてゐる。

大工達は其剽輕な若い顔を見上げて皆笑つた。

『南部つて何だ？』

『あれ！　ごにや〳〵解(わか)んねことを言ふやつよ！』

番頭はお三輪を探してるのであつた。

『あれかア、あれア先刻湯小屋の方さ行つたやうだつけよ！』と大工の一人が言つた。

番頭は石段を下りた。そして湯小屋の女湯の方を覗(のぞ)いて見た。彼は其處で著物を著掛けてゐた客に一寸挨拶をして、板の間にお三輪の單衣を脱いだ籠に目をとめると、チョツと舌打ちをしながら、爪立ちをして濡れた湯槽への階段を中頃まで下りて行つた。

『おいお三輪さん！　この忙しいのに何愚圖(なにぐづ)〳〵してるんだつ、さつさと上つさんしよ、晝日中(ひるひなか)お湯になんぞ這入り込んで……料理番(めんばん)さんが怒つてつぞ！』

湯槽の縁に上つて、別に洗ふでもなく、いゝ氣持になつてぼんやりしてゐたお三輪は、怒鳴り聲を聞くと吃驚(びつくり)してお湯の中に滑り込んだ。

彼女は慌(あは)てゝ上つて來た。そして濕(しめ)つた體に風を入れようともしないで、急いで著物を著出した。額から汗が玉のやうに流れた。一寸帶の格好を見て、帶止めを結びながら下駄をつゝかけた。湯小屋を出てから、彼女はがぶ〴〵とすぐ前に溢れてゐる清水を飲んだ。

『このぐうたら女(あま)め、ほんとに！ちつとは考へてもよさゝうなもんぢやねえか、あゝんお三輪さん！今日は日曜なんだぜ、土曜日曜にはいつも忙しつて位解つてさうなもんだ、暑い〳〵つて皆が晝つから湯這入りしてちや、商賣が出來ねえぢやねえか、人一倍氣が利かねえ癖しやがつて怠けやがる！……あ、お手が鳴るよ……あゝ！　それ〳〵〳〵、えゝこん畜生！』

先刻からぢれ〳〵してゐた料理番は、いきなり猫の額を打つた。お三輪はふつと笑ひたいやうな氣がした。笑つたら大變だつたらうけれども、運よく朋輩の言葉がそれを救つた。

『お三輪さん、八番お客さん、煙草盆は出たよ、お茶とそれから浴衣を出して頂戴、　えゝお二人さん！』

彼女は無造作に汗を袂で拭(ふ)きながら出て行つた。

『いらつしやいまし。』　とお三輪が入つて行つた時、洋服の胡坐(あぐら)をかいて何やら聲高に話してゐた客の一人は、

『やあ……』といつて不思議さうにお三輪の顔を見た。

『おやまあ！』とお三輪も、別にはつきりとした覺えはないけれども、見た事あるやうな顔なので言つた。

『君は何だね、たしかAの笹屋にゐたんだらう？』

『えゝ、あゝさう〳〵、まあよくいらつしやいましたねえ、今度もちやんと私の番ですよ。』

『今度こんな所にゐるのかい、不思議だねえ、いつからゐるんだい？』

『えゝ、まだ來たばかしなんですけどね……』

『ふうむ、兎に角まあ麥酒を一つ冷たくして貰はうぢやないか……全く奇遇だね、あゝさうか、ぢや君一風呂浴(あ)びて來よう！』

『お泊りでいらつしやいませうね……？』

『いゝや、日歸りだ〳〵、折角君の顏を見たんだから泊つて行きたいけれどもね、ハツハヽヽ。』

客達は宿の浴衣に三尺を締めて、お三輪の揃へる下駄を突つかけて湯殿の方に下りて行つた。

『どうしたんだい君！』と離れてから連れの男が言つた。

『なあに、去年僕がAに行つたらう、其時泊つた笹屋にゐた女だよ、あゝして方々渡つて歩くんだねえ。』

『さうして到る所でお馴染みに出つくわすて譯なんだね。』

『馴染？　ふゝさういふ事もあるかも知れないね、だけど君、僕は何だかあいつ餘り好かんね、何だかうだらしがなくてね……一寸仇つぽい所はあるんだけれども。』

『さうだねえ、初め煙草盆を持つて來たのは一寸可愛い顏をしてたぢやないか。』

座敷では、お三輪が興味のなさゝうな顏をして、例の癖の、心持ち首を曲げて。汗になつた襟衣（シャツ）やズボン下などを簀屏風（すびやうぶ）にひろげてゐた。

彼女はそれでもお酌の時には、珍しく著物なぞを著替へて出た。

四

土用に入つてからは一しほ客が込み合つて來た。尤も餘り長逗留の客といふのもなかつたので、出代（でかわ）りが激しく、目が廻るやうに忙しい日もあれば、また思ひの外ゆつくりとした日もあつた。人手が不足なので、本店からは番頭と料理番とを一人づゝ殖（ふや）して來た。それでも知名の人士などが逗留した時などには、多くの手が皆其方にかゝつてしまふので、お三輪は朋輩の受持の分まで引受けなければならなか

つた。

一度或るお客から、『あの女を決して自分の座敷に出してくれるな。』　と言はれてから、支配人なる料理番はお三輪を上等な客の前には出さないやうにした。その不文律をお三輪も結局気樂に思つた。彼女は氣拙(きまづ)い思ひをしなければならぬやうな客の前よりも、笑戯(わらひごと)を言つたり言はれたりするお客か、子供連れの人達の方を好んだ。彼女はまたさう金になる客ならぬ客の區別を餘り知らなかつた。誰にでも一寸附きはいゝのだけれども、彼女の足らないところから來る無作法さが、神經質な客には嫌はれたのであつた。

或女客が言つた。

『お三輪さんがお膳を置いてく時には、いつでも眞直ぐだつた事がないのね、時によるとお箸のある方を向ふになぞして置いてきますよ。』

生憎其頃の忙しい最中に、無口な働き手の飯焚きが足に踏抜(ふみぬ)きをした。そして無理をしてるうちに膿をもつたので、本店の主人が來てK町の病院にやるやうにしてやつた。それから誰か一人づゝが御飯焚きの方に廻つたので、込み合ふ日などには座敷廻りがてん手古舞ひの姿だつた。或日なぞは皆がもう足を引摺るやうになつて、漸く夜の二時頃に床に就いたり、氣がゆるむと同時に帶も解かず蒲團も著ずに倒れて了ふやうな事もあつた。

客が込むと共に膳部の上下も複雑になつて、うつかりするとよく間違つてお膳が運ばれた。それが大抵はあとでお三輪の仕業だといふ事になつた。外の者になら怒鳴つて濟すところも、料理番(めんばん)はお三輪だ

といふと必ず手を振り上げた。彼女は時々心細い悲しげな聲を出して泣きながら詫びる事もあつた。それでも直ぐに其後から、客に出した品を忘れたりして又叱られるのだつた。

駄目だ、到底見込みがないから歸す〳〵といひながらも、目前の手不足に制せられて、つい其儘に七月も暮れて行つた。

お三輪は時々氣が向くと、朝早く起きて、溜つてゐた浴衣や敷布、又は自分の肌著などをもつて橋の下(した)に降りて行つた。湯槽に近い川の水は、落湯の爲めに温(ぬる)んで青く流れてゐた。砂の上に盥を据ゑて袂を背中で結び裸足になつて洗濯をしてゐる彼女の姿は、暫くの間靜かな朝景氣の中に動いてゐた。

彼女は殆ど無意識に手を働かせながら、白い石鹼の泡の溶けて流れて行くのを見まもつてゐた。彼女のさうした忘我の境には、いつも五年前に別れた夫の顏や子供の姿などが、影繪のやうに音もなく現はれるのだつた。子供は生れ落ちるとから姑の手に奪はれて育つた。それを其時は結句欲くなつていゝと思つてゐたお三輪の記憶には、たゞ乳をやる時の感覺が最初に泛んで來る位のものであつた。それに別れる時分にはもう、仲の惡い姑の仕込みで、母親の惡口などを片言に言つてゐた。けれども、それでもやつぱり我ものといふやうな氣がするのは爭はれなかつた。それに自分が置いて來たもので、それ故に自分のものではないと思ふ事は彼女にもひどく寂しかつた。けれども、實のところ今の、彼女の何といふ何ものをも持たないことであらう。有てる者は猶與へられて餘りあるのに、彼女は有たぬうちから、その有てるものを奪られてしまつた……。

お三輪の目には又其後の日の夫の姿も新しいものだつた。彼は少くもお三輪を離すのを喜んではゐな

かつた。彼は朝から酒を飲んでゐた。そして姑が一寸むづかる子供をおぶつて表に出た時、

『またなあ、縁があつたら一緒になられんべや、達者で暮せよ！』と一言(ひとこと)いつた。

二三日すつかり拗(す)ね切つてゐたお三輪は、一言(ひとこと)も物を言はず、いよ〳〵の時涙も溢(こぼ)さずに出たのだつたけれど、後々(あと〳〵)になつてよく其時の夫の言葉をしみ〴〵と思ひ出した。そしてそれから間もなく、後妻を貰つたといふ事を確かに聞いてゐながら、今でも自分が歸るべき所であるやうに、うつかりと思ひ込んでゐる事などがあつた。

こんな時のお三輪は、はたから見ると恐ろしく茫然(ぼんやり)としてゐた。すつかり無口になつてしまつて、氣が抜けたやうに笑ひも怒りもしなかつた。そして無意識に仕事を怠けた。雇主にはそれが圖々しくも太太しくも見えた。

『又お三輪さんが見えないやうだなア、どうしたんだ？』と、夕方近くなつて料理番(めんばん)は思ひ出したやうに聞いた。

『先刻お座敷の方に行つたやうだつけ……お三輪さん！　お三輪さあん！』

けれども返事はなかつた。

珍しく午後から隙だつたので、お三輪は例のやうに茫然(ぼんやり)しながら、座敷の廊下の柱に倚りかゝつて、橋の上を通る人や、岩燕の飛ぶのなぞを眺めてゐた。涼しい風が心地よく彼女を撫でゝ行つた。さうして知らず〳〵ぺたりと廊下に座つてしまつたのを、自分では少しも氣が付かなかつた。

『チョツ！　仕様がねえなア、おいお三輪さん、お三輪さん、見つともねえ何だ！』

お三輪は通りかゝつた番頭に揺り起されて、吃驚(びつくり)して目を覺した。

『料理番(めんばん)さんに見付かつたら大變だぞ』

彼女は恰も犬か猫のやうに、ごろりと板の間に倒れて眠つてゐたのである。

五

『お三輪さん何か買ふものがないかい、呉服屋さんが來てるよ。』 と朋輩の一人が擦れ違ひざまに言つたので、お三輪は疊みかけてゐた浴衣をほふり出して飛んで行つた。

『何ぞ如何ですか、お安くして置きますが。』 と、お三輪が寄つて來たのを見て、女の行商人が言つた。

紺の大風呂敷に包んだ葛籠の中から、浴衣地やメレンス類などを引出して見てゐる一人の朋輩が、

『お三輪さん、何か一つ奢つたらいゝだらう。』 と冷かすやうに言つた。

お三輪は默つてあれこれと手に取つて、一々其符牒を調べて見た。彼女にはどれもこれも皆法外な値のやうに思はれた。

『へえ！ これでも一圓二十錢？』と 女は三尺餘りのメリンスの切端を引摺り出して呟いた。

『それで隨分お安くついてるのですよ！、一寸蹴出しにお格好なところですね……此位の地ですと、尺で切りやあどうしたつて五十錢から出ますんですよ、まあ端切れですからね、隨分見切つてあるんですよ、これで三尺五寸はたつぷりありますもの……』

『おゝ勿體ない〳〵、浴衣が一枚買はれるよ！』

『ではお浴衣を一つ如何ですか。』

けれども、彼女には別に何を買はうといふ心もないのであつた。目に見れば決して欲しくない事はないけれども、それを金と引替へにしなければならぬのを思へば、やつぱり金の方が惜しく大事であつた。

『さ、どつこいしよ、私しやあまた此次にでも何か買ひませう。』と、ちらつと料理番(めんばん)の姿を見た朋輩は如才なく立上つた。

すると買へさうもない對手(あひて)に見切りをつけて、呉服屋も默つて擴げたものを藏(しま)ひにかゝつた。それでも猶お三輪は思ひ切りわるく、先刻の小切れをひねくつてゐた。

『又そんなとこに引つかゝつてる！　仕事を半ばにして何だ！　ほんとに幾ら言つても解らない、馬のやうに鞭でゝもおつぺし叩かれなくつちや駄目なんだな！』

突然背後に例の惡罵がはじまつた。

『はい〳〵はい〳〵。』と、彼女は如何にも其鞭に馴れた馬のやうな調子で、人の前を極りの惡いさうな顔もせずに逃げて行つた。

生れながらに負うて來た軛を、彼女はどう振ひ落しようもなかつた。

其夕方であつた。どや〳〵と午後の汽車で著いた藝者や半玉連れの一行が、間もなくドンチヤン騷ぎを初めた。頻りなしに鳴る呼鈴と共に厨も忙しかつた。

『どうぞ三番のお膳を願ひます、お催促ですから。』と、つい二三日前に來たばかりの女中が、内氣さうに料理番(めんばん)に向つて言つた。

『三番？　今其處にあつたお膳はどうした？』

『二つ並んでたのでせう？　あれを私が三番に持つてつたら、お三輪さんがそれは九番に出すのだつて取り返して行きました……』

『お三輪を呼べ！』

折からパツと點(つ)いた電燈に焦立ちながら、料理番(めんばん)は早くも恐ろしい權幕になつた。

其處へ何も知らないで、お三輪がお飯櫃を抱へて入つて來た。

つか〳〵と立つて行つた料理番は、いきなりお三輪の横顔をものも言はずに平手で打つた。

『あいつ！　何ですよう料理番(めんばん)さん！』とお三輪は吃驚して泣聲を振上げた。

『幾ら言つても言つたゞけぢや解んねから叩くのよ！』

『えゝ何をしました？　え、私が何をしましたよつ！』と、お三輪は見る〳〵気負(きお)つて行つた。

『何も糞もあるか！　お芳さんが折角出したお膳をふんだくつて來る奴があるか、しかも手前が間違つてるんぢやねえか……』

『いえ〳〵間違ひやしませんよ、お芳さんが持つてつたのは、さつき料理番(めんばん)さんがこれは九番だよつて言つたあれですよ……』

『嘘いへ！　あれは上(じやう)の膳だ！』

『上(じやう)だか何だか知りませんけどもね、先刻料理番(さつきめんばん)さんが慥かに……』

『まだ強情を張るか』

彼は脅すやうに拳を振上げた。

お三輪は默つて居なかつた。

『えゝ打つならお打ちなさいとも、そんな理不盡な事を言つて、私ば……』

言ひも終らぬうちに、續けざまに二つ三つ拳が脊中に下つた。

又かと言はぬばかりに、人々は顔を見合して、默つて眉を顰めた。そして成るべく此場を避けるやうに、てんでに用を作つてそゝくさと出て行つた。

かうした有樣を初めて見たお芳は、度膽を拔かれたやうに小さくなつて、恐ろしさうに料理番の顔を偸み見、又お三輪の方を振返つて見た。

お三輪は踞まつて、袂で顔を押へながら肩を慄はしてゐた。此頃の忙しさに、たゞ一束に卷いてゐる髮が少し解けかけて、赤い玉の簪が拔け出してゐる。

ものゝ十分ばかりもさうしてゐた彼女は、ふつと袂を顔から外して、

『どうも濟んませんでした……』と手をついて首を下げた。

彼女はそれから猶よく涙を拭つて、下つた前裾をくゝしに手を入れて引上げながら、立つて出て行かうとした。

其時再び餘憤の去らない聲で言つた。

『いゝ、座敷になんか出なくとも』

お三輪はぴたりと足を止めた。

『さうですか……ぢやあ直ぐに勘定をして貰ひませう』

『よし、勘定をしてやる』

お芳は呆氣(あつけ)に取られて、興奮してゐる二人を見競べた。そして、誰かに仲裁を頼まうとする積りで其場を逃げ出して行つた。

一寸した機みでさう言ひ切つてから、お三輪は却て心持がさつぱりしたやうな氣がした。彼女は決してこゝを去る事を心殘りには思はなかつた。それはたゞいつものやうに、來なければならぬ時が來たに過ぎないのであつた。

彼女は早速女中部屋に入(はい)つて行つて、薄暗い中で自分の荷物の始末を初めた。洗い晒しの浴衣を潰して縫つた大風呂敷に、彼女は別に秩序もなく総ての持物を投げ込んだ。それを括(くゝ)しあげてから、洋傘を新聞紙で卷き、又入れ忘れた下駄や何かを別な新聞紙包みにした。

彼女がかうしてごそ〳〵と始末をしてる間に、料理番(めんばん)は彼女の二ケ月餘りの給料と、祝儀の分けとを勘定して待つてゐた。みんな默つて目ばかり働かせながら、誰も何とも言ふ者がなかつた。そしてなるべく掛り合ふのを避けよう〳〵としてゐた。

『それぢや皆さん、どうも長々お世話になりました……おみつちやん、お次さんやお勝さんに御挨拶をしないで行きますからね、宜しく言つて頂戴。』

彼女は料理番(めんばん)の方は振向かうともしないで、其處にゐた番頭と一人の朋輩とに挨拶をした。

『忘れ物が無いやうにしていかさんしよ。』　番頭がいふと、

『まあ、ではお大事に……』と氣の毒さうに朋輩も手をついた。

お三輪は庭に下りて、薄暗がりに暫く自分の下駄を探すのにもぞ〳〵してゐた。やつとそれが見付かると、彼女は見得も構はず矢庭に其大荷物を脊中に脊負つた。そして胸のあたりで手拭ひや襷やを結び合せて括つた。それから兩手に洋傘と新聞紙包みとをもつて、默つてみやこの最後の閾を跨いだ。

彼女はいゝ下駄を藏つて、擦り減つた下駄のまゝで出たので、荷物の重みに幾らか前踊(まへかゞ)みになつた。後姿は恐ろしく低く小さく見えた。そして其荷物の歩き出す姿は可笑しいものだつた。けれどもそれを見送つて誰も笑ふ人はなかつた。誰もほつとしたやうな心を覺えたと同時に、體が隱れる程の荷を背負はれて、默つてのろ〳〵と、自分では何處までさうして行かなければならないのかも知らずに、尻を追はれ〳〵て行く牛の姿を見た後のやうな、可哀いさうのやうな、重くるしい影が胸に翳したのであつた。

『あんな背負つたれが、何處に行つたつて勤まるもんか』

暫くしてから、早鍋に玉子を搔き廻してゐた料理番(めんばん)が掃き出すやうに言つた。彼は又代りを雇入れなければならぬ面倒や、哀れな者を追うてやつたあとの、自分も知らぬ氣持わるさやらで、何となくむしやくしやとしてゐた。

其處へ小さい方の番頭が入つて來て、其處らを眺め廻しながら、

『へ、あんな薄汚い緒の切れた草履まで持つて行つた』と嘲けるやうに言つた。

けれども、まだ誰も笑ふ者はなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

忘れものをしたやうに、何處かでまだ蜩（ひぐらし）が鳴いている。けれども、今まで雄大に空を彩つてゐた夕日は、不思議な形ちをして歩いて來る彼女を待たないで、お構ひなしにさつさと山の端に隱れて行く。

夕闇は袂に追つて來た。だん〳〵黒くなつて行く兩側の青葉の間に、道は僅かに白く續いてゐる。けれどもそれすらも、彼女が停車場まで行きつく迄には、もうすつかり暮れ切つてしまふであらう。

お三輪―（をはり）―

【入力者注】　不審点は「水野仙子集」と照合の上、以下の変更を加えました。

女として映（うつ）た。↓　女として映（うつ）た。

光るといやうな事は　↓　光るといふやうな事は

腑向いた　↓　俯向いた

山合ひの湯の男にも　↓　山合ひの湯の宿にも

『えゝ何をしました？　え『私が何をしましたよつ！』と『お三輪は見る〳〵気負つて行つた。↓

『えゝ何をしました？　え、私が何をしましたよつ！』と、お三輪は見る〳〵気負つて行つた。

最後の闇を跨いた。↓　最後の閾を跨いだ。

底本：「中外新論」大正七（1918）年第四號
入力：小林　徹
公開：令和三（2021）年五月九日
改訂：令和五（2023）年六月二十三日
リンク：水野仙子ホームページ